



＜シェークスピアを知らなくても大丈夫＞ ひとりで、そして家族で楽しむ ストラトフォード・アポン・エイボン

英国の冬は夕方になると外は真っ暗になり、そこに底冷えする寒さも重なるため、どこに行こうにもつい億劫になりがちである。しかし、そういう環境の中で日々の仕事や育児に前向きに楽しく向き合うためにも、旅行に出たりする気分転換が一番必要な時期ではないかと感じていた。寒い冬には気軽に行ける近場の旅行先だと出かけるハードルが下がる。そこで住んでいるロンドンから比較的近く、観光地として有名なストラトフォード・アポン・エイボンに週末土・日曜日の1泊2日で行ってみることにした。車をお持ちの方はドライブで行かれるのも良い場所なのだろうが、免許を持っておらず、子供のころからの鉄ちゃん（鉄道好き）の自分としてはやはり鉄道の旅を選ぶこととなった。

ストラトフォード・アポン・エイボンはシェークスピアゆかりの地として大変有名な場所である。ストラトフォード・アポン・エイボン＝シェークスピアと言っても過言でないほどシェークスピアがこの地を訪れる前提条件になっている。しかし、情けないことに私はシェークスピアについて著名な劇作家であり詩人であるといった程度の知識しか持っていない。今回の旅ではそんな人間でも楽しめるストラトフォード・アポン・エイボンの過ごし方を体験してきた。なお交通機関や観光施設の時刻、料金などの状況は2023年1月現在のものであり、日々変化している点をご注意願いたい。

1月のある土曜日。旅の始まりはMarylebone駅から。朝9:00発のChiltern Railways、Birmingham Moor Street行きでまずはDorridgeまで乗車。発車時間までまだ時間があるが電車は早めに入線しており、空いている車両を探して乗車する。車内にはwifiとコンセントが装備。旅行中は地図アプリなどを使うことで特

にスマートフォンの電池切れが多く、車内で充電できることは実に助かる。なお前後の座席間隔は決して広くはないので、もし電車がすいているなら比較的多く設置されている向かい合わせ席を利用するのも一つ。電車は定刻通りに発車。ロンドンから出る電車にしては少し珍しい非電化路線、気動車らしい全身が振動する重厚感ある走り出しに心が躍る。パンデミックなどで最近是非電化区間を乗っていなかったもので、久しぶりの感動。走り出して15分も過ぎると車窓は既に郊外の様相。それにしても揺れるなあと思い、速度計アプリで測ると時速160キロも出ている。途中Leamington Spaを通り、10:53に無事Dorridge着。11:21発West Midlands TrainsのStratford upon Avon行きに乗り換え。こちらの車内は近郊型の車両だが足元は少し広め。車内のミニモニターに乗り継ぎ電車の情報が出るのは車内アナウンスが今一つ聞き取りにくい英国の電車では助かる。11:41にStratford upon Avonに到着。



さて、初日の土曜日は午後からバスに乗ってBritish Motor Museumを訪問することにした。この博物館は過去から現在までの英国車を中心とした車が展示されている場所で、今となっては実車を見ることが難しい車も数多く展示されている。その昔、私が社会人になって初めて購入した車は英国のRover 216で、その兄弟車であるRover 214が展示されているらしい…という情報も今回訪問したい一つの理由であった。博物館のあるGaydonという街は他にも車関係の施設が



多数集まり、特に英国の自動車産業界では有名な街。ストラトフォード・アポン・エイボン発の77番のバスに乗れば乗り換えなしでBritish Motor Museumまで行けるが、運行の関係で土曜日の方が便利であったため到着日午後の訪問となった。77番のバスは2時間に1本程度。次のバスまで1時間弱の時間が生まれたので簡単なランチを購入し、軽くお腹を満たしてから向かうことにした。

ストラトフォード・アポン・エイボンは街並みが非常に綺麗だが、食事もバリエーションが多く、美味しいお店も多い街である。そんな中の1件、地元のフィッシュアンドチップスのお店Kingfisherでフィッシュアンドチップスをランチタイム割引価格で購入。テイクアウトして、近くの休憩所でいただく。揚げたてのフィッシュが実に美味しく、寒い中で身体も暖まった。どうでもよいことだが、先述の私が購入したRover車、塗装がKingfisher Blueという色で、こんなところにも不思議な縁を感じながらしばしバスを待つ。77番のバスは定刻にバス停に到着、社内で運転手に行き先を告げ、切符を購入。コンタクトレスカードでも現金でも運賃の支払いができるが、AMEXのカードは対象外なのでご注意ください。乗車口と降車口が同じバスで、次に停車するバス停がバス車内には掲示されないため、到着時間を意識して自ら降りる準備をする必要がある。もし地図アプリなどを持たない場合には運転手に一言降りる場所になったら教えてくれとっておくと安心。

バスは博物館入り口から少し離れた場所に停車する。そこからとても広大な敷地を10分ほど歩いて博物館入り口に到着する。入口で事前購入していた入場券のQRコードを提示すると胸に貼るシールをくれる。これを貼ることで博物館にも別棟のコレクションセンターにも何度も行き来ができるようになる。ちなみに入場券は事前購入しておくとし割引になり、また無料で1年有効なパスに変更できるのでお得である。

まずは博物館棟から見ていく。ここではテーマに応じて多数の実車が詳細な説明とともに展示されている。英国自動車産業創成期の車から始まり、レース車から

軍用車、そして最近のコンセプトカーなど英国における車の歴史を学ぶことができる。私の世代には嬉しい展示として、映画バックトゥザフューチャー2のデロリアンも展示されていた。一台一台見ていくとその歴史だけでも興味深い、何よりも実車が目の前にあることに感動を覚える。



次にコレクションセンターへ移動する。こちらはRoverやジャガーなど英国車を中心に大量のクラシックカーが展示されている。特にジャガー車のコレクションは秀逸。実際に中に乗ったりはできないものの、並んでいる車の価値は一体いくらなのか全く想像もつかないような名車の数々。会いたかったRover214にも無事会えて、「そうそう、こういう内装だったなあ、へえ、214だと窓は手動で開けるんだあ…」などと感無量の思い出となった。





このBritish Motor Museumであるが、館内には子供連れも多く、子供が楽しめるイベントも開催されている。レストランも比較的リーズナブルな値段で家族向けのカジュアルなメニューを提供しており、何よりもトイレが非常に綺麗である。更に今は冬のため少し寒い、外の敷地には小さい子供が遊べるような遊具もあり、ショップにも子供向けのものが用意されているなど、家族連れが長時間楽しめるような場所になっている。ただし、とても広大な敷地のため、歩きやすいスタイルで来ないとしんどいことになるのでご注意を。またバスで来る場合、バスの本数が少ないため、時間はしっかりと事前にチェック。更に乗り遅れないようにバス停には少し早めに向かってバスの到着を待つのが安全。この時期暗くなるのが早い夕刻に一人でバスを待つこととなったのだが、バスが来る場所が博物館からは遠いため人が誰もおらず、ここで良いのか不安を感じながら寒い中待つこととなった。バスはきちんと到着したが、例えば女性の一人旅などの場合、少し早めの明るい時間のバスにされた方がより安心かもしれない。

翌日の日曜日。昨日の博物館歩きの疲れが出たのか、朝までぐっすり眠り、翌日曜日の朝。朝食の後にチェックアウトを済ませ外に出る。朝向かったのはThe Greenwayというサイクリング道路。ストラトフォード・アボン・エイボンの中心街を南下したセブンメドウズ・ラウンドアバウトを起点とし、ミルコートを通り南西のロングマーstonまで続く道である。実はこの道、昔は汽車が走っていた、いわゆる廃線跡



である。この路線は1859年にOxford, Worcester & Wolverhampton Railwayとして開業され、1969年（客車線、貨物線は1976年まで）に廃線となった路線跡地の一部区間がサイクリング道路に整備されている。サイクリング道路であるが、人、そして馬の通行が可能であり、日曜日朝のこの時間は犬の散歩をする人とすれ違うことが多かった。起点近くにある昔の車両を活用したレンタサイクルの店で自転車を借りて走るのも良いが、今回は廃線の跡をゆっくり歩いてみることにした。途中のミルコートまでの往復、約2時間だが、エイボン川の支流を超え、未舗装の道を田舎の自然の風景を眺めながら歩いていると、何とも言えない清々しい気持ちになっていく。もし疲れたなと感じたらその場ですぐに引き返すことをお勧めするが、できればミルコートまでの途中にあるエイボン川を渡るStannels Bridgelは見ておきたい。古い橋であるが、確かに昔ここに汽車が走っていたことを感じさせる場所で、素敵な風景を見ることができる。もしサイクリングであれば、ぜひロングマーstonまで行ってみると良いだろう。

ところで、The Greenwayからも見える場所にストラトフォード・アボン・エイボン競馬場がある。散歩の最後に少し足を延ばして立ち寄った。なお、訪問した日はレースは非開催日。（今年は3月13日が最初の開催予定日）馬好きの自分にとって、イギリスは競馬がほぼ毎日楽しめる天国のような場所であるが、多数ある競馬場のコースレイアウトの違いも面白い。ここストラトフォード・アボン・エイボン競馬場は比較的オーソドックスなレイアウトの障害レース場。日曜日の朝、近所の方だろうか、敷地内で犬の散歩をしているのどかな印象だった。競馬場の敷地を散歩できることは珍しい体験だったが、いかにもイギリスらしい経験だった。





朝からの散歩で足が少し疲れたので、ストラトフォード・アポン・エイボン中心部に戻り昼食を食べる。日本食のお店でどんこつラーメン。接客もとても丁寧で、予想していた以上に美味しく、冷えていた身体も一気に暖まった。ストラトフォード・アポン・エイボンでは他にもインド料理やベトナム料理、洋食のピストロなど様々なレストランが選択可能。一つ気をつけてほしいのが営業時間。レストランも含め、夜の閉店が比較的早い街。もちろん遅くまで開いているお店もあるが、食べたい食事がある場合には必ず営業時間を確認して向かうようにしたい。

シェークスピアをあまり知らない自分であるが、残りの時間でちょっとだけシェークスピアにも触れてみようという旧跡を立ち寄ることにした。ストラトフォード・アポン・エイボンは街が比較的コンパクトで歩いて回るのにちょうど良い。そんな旧跡の一つ、「シェークスピアの学校」を訪問。入口で「時間があまりないから」と伝えたところ、教室での案内ガイド（マスター）の説明だけでも聞いていったらどうかとアドバイスがあり、マスターによる20分ほどの説明を受ける。当時の学校の役割や授業の進め方などの詳しい説明を聴き、大変勉強になった。家族連れならば、お子さまにとってもとても面白い場所にちがいない。英語でシェークスピアの劇を見るのはハードルが高くて、こういった場所で家族でシェークスピアの人物像などを知るのもこの街の楽しみ方の一つだろう。

帰りの電車まで1時間となった。最後に中心街にあるMADミュージアムに立ち寄る。名前がユニークな小さいミュージアムだが、中身は数多くのカラクリのおもちゃや仕掛け人形で埋め尽くされている。そしてどれも実際にボタン一つで動かすことができるのが楽しい。子供いたらきっと目の色を輝かせて楽しむに違いない。決して大きくはない博物館だが、子供連れには特にお勧めである。

今回、1泊2日、それも実際の滞在時間は1日ちょっとという形でストラトフォード・アポン・エイボンを訪れたが、ガイドブックに従ってこの街を観光するとはかなり違った過ごし方を楽しんだ。ロンドンから電車で2時間程度、歴史と文化を感じながら楽しめる街「ストラトフォード・アポン・エイボン」は、ひとり旅にも、家族旅行にもお勧めの場所である。街のいたるところに安らかな英国の古き町の雰囲気漂っており、歩いていて心地よい、そんな街である。次回来的时候には時には少し長めに滞在して、ゆったりと街暮らしを楽しむのも良いかもしれない、そんな気持ちとともに帰りの電車に乗り込んだ。

ジャルパック 中井策太郎

ストラトフォード・アポン・エイボン中心部イメージ図
(実際の縮尺や方位と異なります)

